

人夫曜土
之作田職



助之作織

土曜夫人



現代
社

昭和 33 年 8 月 10 日 印刷

昭和 33 年 8 月 15 日 発行

織田作之助

土 曜 夫 人

発 行 所

株式会社

現 代 社

東京都新宿区南山伏町一番地

(振替東京 102740)

発行者 枝見静人

印刷者 藤本 鞏

藤本綜合印刷 鈴木製本

定価 280 円

乱丁、落丁はおとにかえいたします

目次

土曜夫人

女の構図 五

夜光時計 三

貴族 四

夜の花 六

兄ちゃん 八

東京へ 九

身上相談		一〇六
鳩		一〇六
キヤツキヤツ団		一〇三
暮色		一〇四
登場人物		一〇四
走馬燈		一〇三
解説		一〇六

土曜夫人

織田作之助

版
画
装
釘

島^{しま}

実^{じつ}
珠^{たま}

女の構図

1

キャバレー十番館の裏は、西木屋町に面し、高瀬川が流れた。

高瀬川は溝のように細い。が、さすがに川風はあり、ふと忍びよる秋のけはいを、枝垂れた柳の葉先へ吹き送って、街燈の暈のまわりに夜が更けた。

しかし、十番館のホールではまだ夏の宵だった。

裳裾のようにパツとひらいた顔龐の夜が、葉鶏頭の花にも似た強烈な色彩に揺れて、イヴニングドレスの背中をくりぬいて見せた白い素肌が、蛇のようにくねると、そのくぼみに汗が汗ばみ、女の体臭を男の体臭が絞り出すような夏の夜の踊りに、体の固い若いダンサーのステップもいつか粘るのだった……。

そんなホールの中へ、こおろぎが一匹、何にあこがれたのか、さまよい込んで、ピョンとはねた途端、クイックターンのダンスシューズの先に蹴られて、チリチリと哀れな鳴き声のまま、息絶えたが、その声はバンドの騒音に消されて、たれも気がつかなかった。

木崎三郎も気がつかなかった。

木崎は肉眼がカメラのレンズに化してしまったかと、思われるくらい、視覚神経の病的に鋭いカメラマ

ンであり、ことにグラフ雑誌から頼まれたダンスホール風景の写真を撮りに、三晩もつづけて十番館へ足を運んでいるのだから、ホールの床の上のおろぎという構図には敏感に神経が動く筈なのに、やはり見逃してしまったのは、丁度その時、木崎は二階の喫茶室にいたからであらうか、それとも……。

喫茶室からは一眼でホールの隅から隅まで見下ろせたが、しかし、こおろぎまでは視力が届かない。とはいふものの、よしんばそれが出来ても、少くともその時の木崎の眼にはいらなかったに違いない。

なぜなら、木崎の視線はひたすら、辻陽子というダンサーの姿態や顔の動きを追うていたのだ。憑かれた眼にはそれだけしか見えない。

しかも、それが今夜で三晩も執拗につづいているのだ。最初の晩辻陽子を一眼見て、なぜかどきんとした途端に、もう木崎の眼は、

「よし。このダンサーだ。この女を撮ろう」

と、たちまちカメラのレンズに化してしまつたが、しかし、非情のレンズにしては、何か熱っぽく燃えて、夜光虫のように光った。

木崎は自分の心の底を覗くように、レンズを覗いた。レンズの向うには、陽子のさまざまな姿態があった。が、三日目の今日まで、ついそ一度もシャッターを切らなかつた。

気に入った構図が見つかるまで、めったにフィルムを使おうとしない、名人気質的な、ふと狂気じみた凝り方は、いつものことというものの、しかし、いつもの彼ならいそいそと撮つたようなポーズにも強く反撥していたのは、一体何であらう。

木崎の顔は憂愁の翳が重く澱んで、いらいらと暗かった。が、何を思ったのか、急に立ち上ると、木崎は階段の中段に突っ立った。

そして、陽子へ向けたライカのシャッターを切った途端、一人のダンサーが声も立てずに、いきなり床の上へ崩れるように、倒れた。

2

まるで、わざとのような偶然であった。

木崎のライカがカチッとシャッターの音を立てたのと、そのダンサーの体が崩れるように床の上へ倒れたのと、殆んど同時——というより、むしろ、シャッターの音が防音装置のピストルのかすかな音のように、彼女を倒した——と言ってもいいくらいだった。

木崎も驚いたが、客もダンサーも、そして楽師もあっと思った。

バンドの調子は、いきなり崩れた。

一階のホールの正面の演奏台ではスウィングバンド、二階の廊下から突き出したバルコニー風の演奏室にはタンゴバンド——この二つのバンドが交替で演奏するのだが、丁度その時はタンゴバンドの番だった。曲はクンパルシータ。

みんな知っている曲ゆえ、一層その崩れ方が判った。が、楽師はあわてて調子を取り戻した。昨日までいてよそのホールへ引っこ抜かれたバンドの代りに、今夜から新しく雇い入れられたバンドだった。いわ

ば初演奏だ。だからすくなくとも今夜はおかしいくらい熱心だった。しかし、取り戻した調子を張り上げた時は、もう誰も踊っている者はなかった。

ステップをずっと引き寄せてから、その反動でぐっと女の体を押して行く——いわば情熱的にアクセントの強いタンゴの中でも、クンパルシータの曲は誰も踊りたがり、お茶を引いて椅子に「カマボコ」になっているダンサーすら、同じカマボコさんをつかまえて、女同士踊っていたくらいだが、しかし倒れた茉莉の顔は、余りに青すぎた。

ただごとではない。

「醜態だね。転ぶのはまだ早いや。宵の口じゃないか。不見転ダンサーか。誰なんだい」

ステップを踏みはずして、転んだのか——と皮肉りかけた口の悪い客も、

「あ、茉莉が……」

倒れたのかと気がつくのと、あわてて相手のダンサーをはなして、

「——茉莉誰と踊ってたんだい。柔道屋か」

茉莉はまかりまちがっても転ぶような、そんな下手なダンサーではなかったのだ。

「踊りでは茉莉、顔では陽子」

と、十番館では定評になっていた。

「えッ、茉莉が……？」

と、陽子も顔色を——いや、陽子の顔色は既に木崎がシャッターを切った時なぜかはっと変っていた。

「あ、うつされる！」

と、ぎょっとしたように、いきなりそむけた顔が、みるみる青ざめた。

「失礼します」

陽子は客からはなれて、木崎の方へ行こうとした——その途端、茉莉が倒れたのだ。

写真も気になったが、それよりも茉莉のことが……。ちょっと迷ったが、やはり陽子は人ごみの間をすり抜けて、茉莉の方へかけよった。

茉莉の顔は、青ざめた陽子よりも、血の色がなかった。頬紅の色まで青く変っていた。

そして、口から泡をふき出して、床の上を蛭のようにかすかにうごめいている——その傍に、青年がキョトンと突っ立っていた。

3

「あ、京ちゃん」

茉莉の倒れている傍に、突っ立ってキョトンとしている青年の顔を見ると、陽子は茉莉よりもその青年に声を掛けた。

十番館では「京ちゃん」で通っている京吉という二十三の青年だった。

京吉はこのホールでも、チケットなしで踊れた。

天才的にダンスが巧いのだ。ダンス教師も京吉のステップを見てみると、自分が情なくなるくらいだっ

た。京吉の相手をしたダンサーは、慾も得も商売氣も、そして憂さも忘れて——いや自分を見失ってしまふくらい、うっとり甘くしびれるのだった。

「バンドがよくって、好きな曲で、リードの素晴らしく巧い奴と踊ると、よっぽど生理的にいやな奴でない限り、ふっと、こいつに口説かれてみたい——と思うことがあるわ」

と、浮氣なダンサーが言っているが、身持ちの固いダンサーでも、ダンスの三昧境へ巧みにリードされて行くと、ふっと相手に身を任しているような錯覚に、ゆすぶられることもあるという。

ダンスの持っている強烈な、——殆んど生理的なリズムにまで燃える魅力の一つであろうか。京吉はそんな魅力を持っている少数の一人だった。

おまけに、美貌だ。

二十三歳だが、十代に見えるくらい、一見無邪気な可愛い顔立ちで、ほっそりと瘦せた横顔の青白さは、まるで胸を病む少女のようにいじらしく、ふと女たちにはやるせなかった。が、美しい眉に翳るニヒルな表情や、睫毛の長い眼のまわりの頹廢的な黝ぐろい隈や、キッと結んだ唇の端にちらと泛ぶ皮肉な皺は、何かヒヤリとした苦味のアクセントを、京吉の顔に冷たく走らせて、ふと三十男のようであった。

ハンサムという言葉では、当たらない。いわば、女たちをうっとりさせると同時に、ぞっとした寒氣を感じさせる美貌だ。

だから、みんな京吉と踊りたがった。

「チケットを倍にして返すから、あたしと踊ってよ。ねえ、京ちゃん、明日来て、あたしと踊ってよ」

と、頼む女もあった。京吉となら、チケットを貰うのが済まないというのであろう。

その京吉と、茉莉は今夜踊っていたのだ。

——と、陽子は思い出して、

「どうしたの、一体……」

と、せきこんで、たずねた。

「う……？」

京吉はちらと陽子の顔を見た。

「あんな、茉莉と……」

踊ってたんでしょ——と、あとは眼できいたが、京吉は答えず、不機嫌な唇を結んで、キョトンとした眼で、茉莉を見下ろしていた。

繋ぎ提灯の、ピンク、ブルウ、レモンエローの灯りが、ホールの中を染めていた。

が、茉莉の顔はその色に染まりながら、いや、そのために一層、みるみる蠟色の不気味さになって行くのが、判るようだった。

苦しそうだ……。

4

口からふき出している泡の間から、だらんと垂れた舌の先が見え、——茉莉はかすかに唸っていた。

バンドは間抜けた調子で、誰も踊っていないホールへ相変らずタンパルシータの曲を送っていたので、茉莉のうめき声は、ともすればその音に消されたが、苦しうにうめいていることだけは、さすがに風のように陽子の耳には判った。

「あ、いけない！」

茉莉のうめきは、いのちの最後の苦しみを絞り出しているのかも知れない——といういやな予感に、陽子はどきんとして、

「——お医者を……」

呼びに早くボーイを……と、あわてて振り向いた途端、木崎の姿が眼にはいった。

木崎は相変らず階段の真中に突っ立っていた。

十番館ははじめ進駐軍専用のキャバレエとしてつくられたので、シャンデリア代りに祇園趣味の繋ぎ提灯をつり、階段は御殿風に朱塗りだった。

ことに正面の階段は、幅がだだっ広く、ぐっとホールの中へ朱の色を突き出して、まるで歌舞伎の舞台のようであった。

そんな階段の真中に、役者のように立っているのは、いい加減照れそうなものなのに、木崎は照れもせず、カメラを覗いていた。

「あ、また……」

うつされるのかと、陽子は思わず顔をそけたが、しかし、レンズの焦点は倒れている茉莉の体へ向けら

れていた。

ホールの真中でダンサーが倒れたところで、きのうきょうの世相がうみ出している数々の生々しい事件にくらべれば、大した異色があるわけではない。が、「ホール風景」というグラフの取材としてねらえば、めったに出くわせる構図ではない——という職業意識に燃えて、木崎はあわててカメラにしがみついていたのだ。

一つには、そんな場面をうつすことで、無意識のうちに、なぜか自虐的な、そして反撥的な快感があった。が、その理由は木崎自身にもよく判らない。

いつもは事務室にいる十番館のマネージャーは、たまたまその夜新しく雇い入れたバンドの演奏ぶりを見ようとして、ホールの中へ来ていたので、階段の木崎を見た途端、木崎が何をうつそうとするのか、すぐ判った。

「あ、困りますよ。こんなところを……」

うつされては……と、とめようとしたが、木崎は無我無中でシャッターを切ると、ソワソワと階段を降り、何か憑かれたような大股でホールを横切って、姿を消してしまった。

あっという間もなかった。陽子もマネージャーも木崎を呼びとめる間もなかった。

いや、あっという間といえ、すべては一瞬の出来事だった。

その証拠に、茉莉の体がやがてボーイたちの手で事務室のソファの上へ、運び移された時は、まだクンバルシータの一曲は済んでいなかった。

タンバルシータの曲が終ると、ひとびとははじめて踊りを思い出し、ホールの騒ぎも冷淡に収まって行った。

マネージャーはすかさず、タンゴバンドをスウィングバンドに取り替えた。熱演のタンゴバンドには十分満足していたが、ホールの気分を変えるためだった。

そして、茉莉の体を気づかって、事務室までついて来たダンサー達を、

「ホールだ、ホールだ。お客様が待ってる、何をボヤボヤしてるんだ。踊った、踊った」と、ホールへ追いやった。

「でも……。せめてお医者様が……」

来るまで、陽子は茉莉の傍にっていたかった。茉莉とは一番親しかったのだ。が、

「大丈夫。心配はいらん。茉莉は事務所の者が見ている」

と、言われると、もはや陽子はマネージャーの言葉にはさからえなかった。

「京ちゃん、君も行って、踊ったらどうかね」

「おれか。冗談言うねえ」

と、京吉は茉莉の蠟ざめた顔を見ながら、マネージャーに言った。

「——病人と踊れるもんか。——といって、ほかのダンサーとじゃ、茉莉にわるいや。今夜はおれ、茉莉